



先行き不透明な時代が続くからこそ、 夢や希望のもてるチャレンジが必要です。

ヤスハラケミカル株式会社 代表取締役社長

安原 禎二 Teiji Yasuhara



予想以上に速いスピードで回復した 2009年

当事業年度の日本経済全体の動向は、2009年の2月か3月を底に、金融不安以降の在庫調整局面は脱したと思っています。もちろん個人消費の低迷やデフレの影響はあるものの、全体としては在庫調整が終わった結果、自動車業界や家電業界など、しっかりとした需要がある業界や企業では、2009年4月以降急激に生産は回復しました。

当社においても、力強い回復をしている企業の需要に牽引されるかたちで、7月以降生産も向上しています。

良い面と厳しい面がある場合、ニュース報道等では厳しい面ばかりがクローズアップされることがよくありますが、そうした偏った情報により全体像を見誤っては危険です。全体像をしっかりと見極めていく視野や観察力が重要です。

回復の原動力は環境や健康などの 高付加価値分野

今、国内的にも国際的にも必要とされているのは「環境」や「健康」に関する分野の製品です。その意味で、当社においても「環境」や「健康」分野に関わる高付加価値な製品が、回復の原動力となっています。

そのような高度な技術が必要な製品こそJAPANブランドが生かせる分野であり、天然由来のテルペンを原料とする当社にとっても、最も得意な分野といえます。

しかし「環境」や「健康」に関する市場やニーズも刻々と変化しています。そうした状況を冷静に見極めながら、市場やニーズの変化に対応する準備を進めています。

研究開発の質的向上を目的に 新研究棟を整備

先端的なメーカーに対して新しい需要を提案し続けるには、当社の技術力・開発力の水準をさらに高める努力や施策が必要です。

そこで2010年6月、福山工場内に新研究棟を整備し、研究開発部門を移管しました。

研究開発部門の拠点に求められるものは、安全性の確保はもちろん、創造性や活発な情報交流といった要素です。その意味で、福山工場は工業団地内にあり、しかも海と空に隣接した開放感ある立地なので、場所としては最適です。

建築的にもデザインと機能をとことん追求し、創造性豊かな「器」ができました。これからの成果に、ぜひ期待してください。

全社のIT管理を統合する 瑞穂プロジェクト

基幹システムソフトの更新時期が迫ってきたことと、新しい国際会計基準への対応から、基幹システムの見直しが経営テーマとしてあがってきました。シンプルなシステムに移行する選択肢もあったのですが、こうした厳しい時代だからこそシステム更新をチャンスと捉え、経営体質の強化に利用できないかと考えたのです。

そこで「瑞穂プロジェクト」という名称で、全社的な取り組みをすることを宣言。ITスタッフだけでなく、各部門で活躍中の管理職手前の若いスタッフ達によるプロジェクトチームを作り、そのチームを中心に、全社を巻き込んだプロジェクトをスタートさせました。（詳細はP.5からの特集1をご参照ください）

来年4月1日の稼働を目指し準備を進めています。この作業の中で思わぬ副次的効果も得ることができました。

その一つが業務内容の見直しで、企業活動のIT管理業務すべてを統合するシステムに移行するため、各業務や会計処理を一から見直す必要があります。客観的な見直しの中で不必要な処理や、重複していた

業務、ムダを省ける仕事など、日常業務の中では見えなかったものが見えてきたのです。

また社内の風通しの面でも有効でした。各部門、各事業所の精鋭が協力しながらプロジェクトを推進しているおかげで、部門間や工場間の情報交流も進んでいるのです。彼らは将来のヤスハラケミカルを背負って立つ人材ですから、全社的なマネジメントを俯瞰して観る視点を学ぶ上でも、貴重な経験といえます。

まだまだ先行き不透明な時代が続きますが、暗い面ばかり見ていたら、前には進めません。瑞穂プロジェクトも新研究棟も、前へ進むための一歩だと思っています。全社員が、夢や希望を持って前へ進めるよう、これからもチャレンジを続けていきます。



撮影協力：「恋しき」広島県府中市

「恋しき」の由来

創業明治5年恋しきは、府中市を代表する料亭旅館として、多くの政治家や財界人、文化人の中で永年愛されてきました。一時期経営危機のため存続が危ぶまれましたが、保存活用を願う地元財界有志による保存・再生事業が行われ、2007年11月に再生オープン。現在は約300坪の日本庭園を中心に、カフェや懐石料理店、そば処を備えた飲食・イベント・プライダルの拠点として、府中市民や観光客に利用されています。